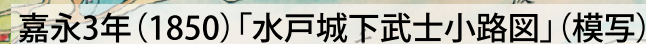


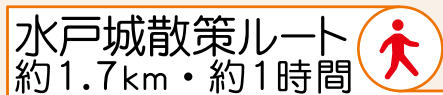


弘道館

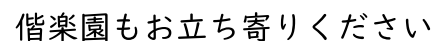
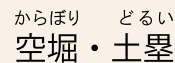
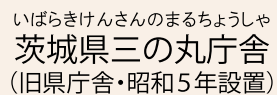
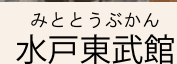
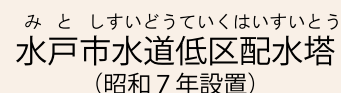
周辺散策マップ



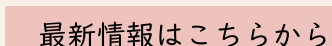
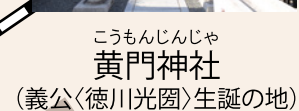
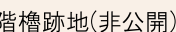
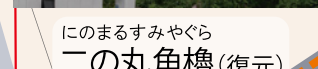
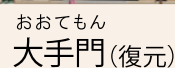
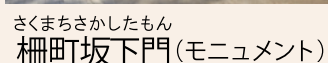
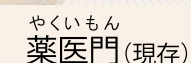
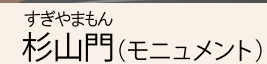
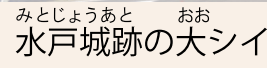
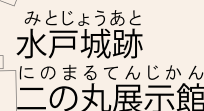
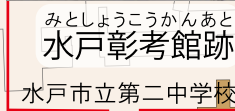
水戸城二の丸に藩主の御殿があり、三の丸には藩校弘道館が置かれました。当時、千波湖は現在の4.88倍の広さがあり、藩主や重臣は水戸城から偕樂園まで船で渡りました。



二の丸角櫓往復は、約700m・約20分追加になります。



JR常磐線水戸駅北口からバスで約15分
 4番乗り場：偕楽園行き→「偕楽園・常磐神社前」下車
 桜川車庫方面行き→「歴史館偕楽園入口」下車
 6番乗り場：偕楽園行き→「偕楽園」下車



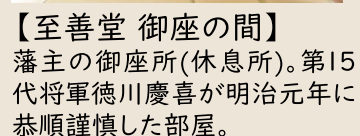
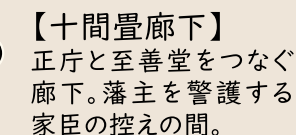
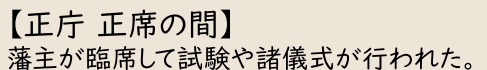
弘道館

偕樂園

いばらきの公園

弘道館事務所 〒310-0011 水戸市三の丸 1-6-29
電話：029-231-4725

弘道館 館内案内



齊昭書。裏に「天保十二年仲冬日書」とある。仲冬は陰暦の11月。

② 二大字「尊攘」

齊昭の命により、側医松延定雄(号は年)が揮毫した。尊攘は尊王攘夷を略したものでその理念は幕末日本のスローガンとなっていた。平成10年より現在の場所に展示されている。



齊昭書。「游於藝」は、『論語』の一節「子曰志於道 據於徳 依於仁 游於藝」(子曰く道に志し 徳に拠り 仁に依り 芸に遊ぶ)による。「芸に遊ぶ」の芸は六芸、礼(儀作法)、楽(音楽)、射(弓術)、御(馬術)、書(習字)、数(算数)をさす。文武にこりかたまらず 悠々と芸を究めるという意味。

④弘道館記碑拓本

齊昭撰文および書。「弘道館記」は弘道館の建学の精神と教育方針を記したもので、天保9年(1838)に齊昭の名で公表された。草案の作成は藤田東湖が命ぜられ、学者らの意見を取り入れながら、一字一句に心血が注がれて完成した。石碑は、弘道館公園内の八卦堂に納められている。

⑤要石歌碑拓本

齊昭詠および書。「行末毛 富美奈太賀幣曾 蜻島 大和乃道存 要那里家流」(行く末も踏みなつかへそあきつ島 大和の道そ要なりける)と読み、日本人としての進むべき道が示されている。石碑は孔子廟の南側に建っている。

⑥「至善堂」扁額

齊昭書。「至善」は、『大学』の一節「大学之道 在明明徳 在親民 在止於至善」(大学の道は明徳を明かにするに在り 民に親しむに在り 至善に止まるに在り)による。「至善に止まる」とは完全無欠な善をよりどころとして行うという意味。

⑦種梅記碑拓本

齊昭撰文および書。齊昭が弘道館や偕樂園に梅を植えさせた趣旨が書かれている。石碑は八卦堂の南側に建っている。



齊昭が自ら鑄造し子供たちに分け与えたという人形をモチーフに拡大彫刻されたもの。本来の農人形は手のひらに乗る大きさで、齊昭は食事の際、膳の隅に置き、食前に飯を供えて農民に感謝をしたという。

9 学生警钟

齊昭書および作。表面に「物理学 人乃爲仁登 佐也加爾毛 曉告流 鐘能古慧鉦」(物理学人のためにと さやかにも 曉つぐる鐘の声かな)という和歌が、内面に鐘を鑄造した由来が記されている。上部天井近くに表面と内面の拓本を掲示している。鐘楼は孔子廟の西側にある。

弘道館の建築について

弘道館は、水戸藩第9代藩主徳川斉昭(1800～1860)によって創設された藩校です。天保10年(1839)水戸城内三の丸の地に敷地が決まり、翌年から建設工事が開始され、天保12年(1841)7月に落成しました。

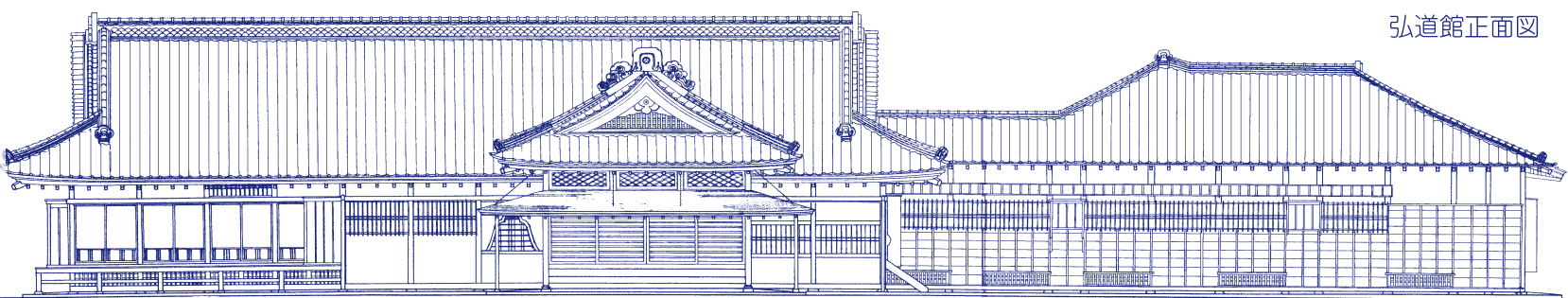
正庁は、学校御殿ともいい、藩主が臨席して文武の試験を行ったところで、至善堂は藩主の御座所(休息所)でした。それぞれ床、棚を備え、面取角柱、長押(ながし)をまわした書院造で、十間畳廊下(長廊下)によって結ばれています。正庁には付書院もあります。

屋根は、正庁の玄関左右側面を入母屋造(いりもやづくり)とし、正庁の背面と至善堂は寄棟造(よせむねづくり)で、すべて棧瓦葺(さんがわらぶき)で輪違瓦(わちが

いがわら)が組み込まれた大棟(おおむね:屋根頂部の水平な棟)の大きいことが地方色を示しています。また、玄関の軒下には、柿葺(こけらぶき)の下屋根がついているのが特徴です。下屋根は独立柱で支え、さらに吊鉄物で上方に釣っています。

江戸時代末期には、各地に藩校が造られました。現存する遺構では、この弘道館は規模が大きく、しかも整ったものです。弘道館の建築は、書院造建築の正統を継ぐものですが、大柄で簡素な手法には、悠々とした趣があって、大藩の風格を感じさせるものがあります。

[参考:『茨城の文化財 第39集』]



弘道館正面図